

平成 22 年 6 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19520588

研究課題名（和文） 古代西海道における出土文字資料の展開と地域性に関する研究

研究課題名（英文） A study on distribution and regional characteristics of ancient historical documents excavated from Saikaido region

研究代表者

柴田 博子（SHIBATA HIROKO）

宮崎産業経営大学・法学部・教授

研究者番号：20216013

研究成果の概要（和文）：古代西海道における出土文字資料の広がりを確認し、地域性を検討した。九州北部では7世紀代に文字資料が見られ始め、8世紀に広く展開するが、九州中部では8世紀後半から、南部では9世紀からに下る。木簡は大宰府跡を中心に北部に多いが中南部では僅かである。墨書土器は、北部では官衙・寺院や官営生産遺跡で多く出土するが、中部では官衙・寺院の造営を支えた集落遺跡での出土量が多く、南部では生産遺跡とともに有力者の居宅跡が目立ち、平安初期の開発・経営活動との関連が窺える。

研究成果の概要（英文）：Distribution and regional characteristics of ancient historical documents excavated from Saikaido region, current Kyushu area, were studied. In the northern Kyushu area, historical documents started to appear in the 7th century and spread out in the 8th century. In the middle Kyushu, however, they came into being in the late 8th century, and in the southern Kyushu, in the 9th century. Mokkan, or wooden tablets, distributed mainly around Dazaifu, local government of Kyushu area located in the northern Kyushu, and were seldom found from the middle and southern Kyushu. Bokushodoki, or pottery with ink inscriptions, was mainly excavated from the sites of administrative institutions, temples or state-operated factories in the northern Kyushu, while, it was often found from the settlements of construction workers of those facilities in the middle Kyushu, and from the residences of influential people along with factories in the southern area. Those indicate that distribution of ancient historical documents is related to the regional development and economic activities of the early Heian Period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：日本古代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：出土文字資料、墨書土器、古代西海道、地域性

## 1. 研究開始当初の背景

文字（漢字）の導入は、長く無文字社会であった日本列島の政治・社会を大きく変化させた。7～8世紀における律令国家の成立にもなって文書による行政が行われ、文字の使用は列島内に本格的に広がった。そして統一国家の支配体制を支え、さらに漢字から仮名を発生させて今日に至っている。

しかし、地域社会への文字の広がりの様相は必ずしも一様ではない。それは当然のことながら、当時の列島内に、さまざまな特徴をもつ多様な社会があったからと考えられる。

日本古代史では文献史料に限られており、木簡や墨書土器など文字の書かれた出土資料の重要性が広く認知されている。しかしそれらの研究はこれまでのところ、最も出土量の多い木簡であれば、出土の質・量とも他地域を圧倒する宮都を中心とするものであり、また墨書土器や文字瓦については、やはり出土量の多い関東・東国をフィールドに進められてきた。

研究代表者はこれまで、九州南部でまとまった出土のみられる文字資料としては唯一の、墨書土器について、日向国出土のものを集成し、これを隣国の豊後国と比較した。その結果、墨書土器の始まり、盛行期、終焉、また記載部位などに地域差が見られることが窺えた。そこで、さらに鹿児島県や九州北部などとも比較していくことで、地域性を見いだすことができると考えた。

また、出土文字資料を用いて地域社会像を再構築する場合、各資料の性格を十分にふまえなければならぬはずであるが、残念ながらこれまでの研究はそのことに十分な配慮を払ってきたとは限らないようであった。そこで本研究では、出土文字資料の性格を確認しつつ検討することに留意した。

## 2. 研究の目的

(1) 木簡・墨書土器・文字瓦・漆紙文書・金文などの文字資料ごとに、それらの資料としての特性を明らかにし、限界と可能性を確認する。

(2) 九州から南西諸島における文字の広がりを確認する。

(3) 文字の広がりをもたらし、また支えた社会的要因として、官衙・官道、居宅・集落、製鉄など生産施設、荘園など開発の様相との関係を検討する。

(4) 古代西海道における地域性を考察する。

## 3. 研究の方法

(1) 出土文字資料の特性の研究について、木簡・墨書土器・文字瓦・漆紙文書・金文などの文字資料それぞれの性格の検討を行い、整理したうえで、地域社会を検討する素材として活用するために、各資料の限界と可能性を検討する。

(2) 文字の広がりと社会的要因について、①出土文字資料に関する発掘報告書・概報など資料・文献の調査を行う。②連携研究者の協力を得ながら、各地の出土文字資料の現物および出土遺跡を実見・調査する。③連携研究者の協力を得ながら、情報交換と資料の分析・検討を行う。

(3) 連携研究者の協力を得ながら、古代出土文字資料データを集成し、学界に提供する。

## 4. 研究成果

(1) 出土文字資料の特性の研究について。

漆紙文書・木簡は、書くために用意した素材に書かれた資料である。一方、墨書土器・文字瓦は本来筆記を目的としない素材に書かれた資料である。

前者は文書行政の一端を示すもので、達筆な記載から癖の強い文字まで幅はあるが、広義の行政文書の作成能力を窺わせる文字資料群である。ただし木簡は、湿潤な環境下という特殊な条件がなければ遺存せず、また漆工房がなければ漆紙文書は発生しない。よって木簡・漆紙文書の出土の様相は、古代の木簡や紙の使用の様相とは必ずしも一致しない。

一方、後者の資料は土中で分解しないため遺存性が高く、出土の様相は発掘調査の有無に左右されるだけである。しかし瓦は古代には窯・官衙・寺院に限られ、筆記は工人によると考えられるから、地元住民ではなく地域外から来た技術者が書いた可能性を考慮しなければならず、必ずしも出土した地域社会における識字や文字文化の広がりを示す資料とはいきれない。また、土器は宮都から集落まで広く使用されたが、集落出土の墨書土器のなかには識字能力を疑わざるをえないものが少なくない。

出土文字資料の検討は、以上のような各資料の特性をふまえてなされる必要がある。

(2) 文字の広がりについて。

①九州北部

朝鮮半島に近い九州北部では、6世紀末～7

世紀前半から土器への線刻・ヘラ書が、周防灘北部沿岸、遠賀川流域、福岡平野、佐賀平野で見られる。硯や転用硯も6世紀末～7世紀半ばのものが周防灘沿岸や筑紫平野東部で出土しており、筆・墨を用いて筆記することがこの時期に始まっていたことが窺える。また文字瓦は、福岡平野や豊前の宇佐地域で7世紀～8世紀のものが見つかっている。これら7世紀までの比較的古い時代の出土文字資料は、宇佐地域と肥後北部の菊池川流域付近を結んだ線より南ではみられず、ほぼ九州北部に限られている。

8世紀には官衙・官衙関連遺跡、寺院跡、流路など祭祀遺跡、製鉄など生産遺跡で、まとまった量の墨書土器が出土し、また木簡も大宰府跡で約1000点出土している。鴻臚館跡出土の木簡や墨書土器には対外交流の様相も窺える。

なお、佐賀県小城市丁永遺跡では、7世紀末に遡る可能性のある刻書紡錘車が出土していることが注目される。刻書紡錘車は、日本列島内では関東地方の限られた地域に集中して出土しており、当該地域からの人の移動、すなわち防人がもたらしたという可能性を想定させる資料である。

#### ②対馬・壱岐・五島列島

古くから対外交流の重要な経由地であった対馬には、7世紀半ばに金田城が築かれ、政府の軍事拠点が設けられるが、古代の出土文字資料は貨泉が知られるにとどまっている。壱岐も、同様に対外交流の経由地であるが、僅かな墨書土器と木簡が出土しているのみで、このうち墨書土器は九州北部からの搬入品とみられている。五島列島の福江島で出土した僅かな墨書土器も九州北部からの搬入品の可能性がある。したがって、古代には対外交流の重要な経由地であったこれら島嶼部の地域社会では、文字文化が九州北部のように広がっていたという様相は、現在までのところ確認できない。

#### ③九州中部

九州中部では、肥後国の墨書土器の出土量の多さが目を引く。熊本市内に限っても1000点近くを数える。古いものは熊本市大江遺跡群で7世紀末の硯とともに出土したヘラ書土器であるが、硯・土器ともに肥後国外からの搬入品と考えられている。墨書土器は8世紀後半以後からみられ、肥後国府・国分寺の造営を支えたと推定される広域の集落遺跡で多量に出土している。

また、鞠智城で出土した荷札木簡の出土層は7世紀後半～8世紀前半とみなされており、山城の造営にともない文字を使った活動が行われていたことを窺わせる。

豊後国では、宇佐市弥勒寺跡などで7世紀に遡りうる文字瓦が出土している。8世紀前半の硯も出土しているが、土器への文字記載

はヘラ書や線刻はあるが、墨書は8世紀後半からである。出土の総量は肥後国よりはるかに少ない。

木簡は、国東市飯塚遺跡で9世紀前半を中心とするものがまとまって出土している。宇佐八幡宮弥勒寺の荘園経営に関わる遺跡と考えられ、墨書土器も達筆な記載をふくみ、まとまってみられる。

#### ④九州南部

九州南部の日向国では、北部よりも中・南部で墨書土器の出土量が多い。

日向国では古墳時代から継続する集落で8世紀前半の墨書土器が僅かにみられるが、盛行するのは9世紀に入ってからである。薩摩国・大隅国ではあわせて1000点を越える古代の墨書土器が出土しているが、このうち8世紀に遡る可能性のあるものは僅かで、ほとんどが9～10世紀である。また硯や転用硯の数は目立って少ない。

なお、鹿児島県薩摩川内市川骨遺跡では、九州南部で初めての多文字の墨書と人面墨書がなされた土器が見つかった。多文字墨書は千葉県に多くみられるもので、背景の分析には比較検討を要すると考えている。

また、大隅国で最も多くの文字資料を出土している始良町外園遺跡では、約200点のヘラ書土器があり、記載内容には「足」が多い。遺跡の立地が日向国府と大隅国府を結ぶ官道沿いと想定されること、著名な静岡県浜松市伊場遺跡でも「足」墨書土器があることから、外園遺跡の性格を検討する上で関連が注目される。

#### ⑤南島

大宰府の出先機関が設置されていたとの見解もある喜界島の城久遺跡群では、文字資料は極めて少なく、硯は未発見である。南島の出土文字資料は、カムイヤキ壺や滑石製石鍋へのヘラ書が数点知られるだけで、九州南部で展開していたような文字文化が地南島の域社会に広がった形跡は確認できない。

(3) 古代西海道において、漆紙文書の出土は大宰府と観世音寺に限られ、文字瓦や金文の出土も九州北部にほぼ集中している。木簡は、質・量ともに大宰府跡が圧倒的で、800点余の削り屑をふくみ、点数は1000点を越える。これを除いた筑前国で200点弱、筑前国以外の出土点数は120点にしかならず、筑前国一国に及ばない。このように、現在までのところ古代木簡の出土点数は圧倒的に大宰府と筑前国に偏っている。そこで西海道全体を見渡そうとするならば、九州中部・南部でも相当量が出土している墨書土器が有効な検討材料になる。

九州北部で、8世紀代の墨書土器が見られる遺跡は、大宰府跡や鴻臚館跡、白鳳寺院跡や国府・郡家跡といった、官衙や寺院が中心

である。文字文化が仏教や行政を通して広がったことを窺わせる様相であり、7世紀代に遡る木簡も同様である。さらに元岡・桑原遺跡群のように大規模な官営製鉄施設と思われるところでも出土量が多い。

九州中部では、北部と異なって8世紀の早い時期のものは少なく、8世紀後半以後が多くなる。墨書土器の出土は官衙・寺院遺跡にも多いが、それだけでなく、それらの造営を支えたと考えられる集落遺跡での出土が目立つ。

九州南部では、国分寺以前の寺院の存在が明らかでなく、9世紀代の寺院遺跡も確認されていない。国府跡・国分寺跡で墨書土器は出土しているが、量的に多いのは官衙遺跡や寺院跡ではないことが注目される。

たとえば、日向国の古代郡界は必ずしも明らかではないが、『倭名抄』の郷名比定地から想像される地域から、仮に郡別に古代墨書土器の出土遺跡・出土量を比較してみたところ、北を豊後国に接する臼杵郡はまだ1遺跡4点が知られるのみである。国府・国分寺が所在した児湯郡は、硯や転用硯は日向国内で最も多いが、墨書土器はあまり多くない。宮崎郡や諸県郡と南へ向かうほど出土量は増え、特に諸県郡では郡家が所在したと推測されている東諸県地域よりも、それ以外の地域に多いことが目を引く。このうち北諸県地域には後に島津荘が置かれ、西諸県地域には薩摩国府へ通じる官道が通り、いずれも9世紀以後に新たに形成された遺跡が多いことで知られている。南諸県地域は大隅国府に通じる官道が通り、短期間の製鉄が行われたと考えられる曾於市高篠遺跡では100点を越える墨書土器がまとまって出土している。

このように九州南部では、官衙遺跡や寺院跡よりも、有力者の居宅跡などの開発・経営の拠点、製鉄など生産遺跡と考えられる遺跡で、墨書土器の出土量が多いという特色を指摘できそうである。

また、岩手県奥州市道上遺跡から出土した棒状の木簡は、一種の榜示札を多面体で作っていること、杭に転用されて出土したことなど、鹿児島県薩摩川内市京田遺跡出土告知札木簡と、使用形態・木簡の形状ともに極めてよく似ているものである。京田遺跡は薩摩国府から近く、また道上遺跡は胆沢城の近郊に所在しており、古代国家の支配領域の北端と南端で類似の木簡が作成・使用されていたことは大変興味深い。板状に加工せず自然木を利用していることは、近年韓国で出土している6世紀代の木簡にみられる形状であるが、関連性については今後の比較研究が必要である。

(4) 研究代表者は「日向国出土墨書土器集成・補遺(2)」を作成して、本研究の研究成

果報告書に掲載し、連携研究者である永山修一も、薩摩国出土の墨書土器を悉皆調査し、「薩摩国出土古代墨書土器集成」を作成して研究成果報告書に掲載した。この報告書は国立国会図書館はじめ学界関係者に配布した。

なお、研究代表者および連携研究者である坂上康俊・永山修一の計3名が、熊本市教育委員会において熊本市出土墨書土器の釈読を行った成果が、「資料集成 熊本市出土墨書・ヘラ書き・刻書土器集成(1)」(『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書集 平成20年度』熊本市教育委員会、2009)のなかで公表されている。

また同じく3名が九州大学筑紫キャンパス出土墨書土器の釈読を行った成果が、山根謙二著「筑紫地区出土墨書土器の再検討」(『奴国の南 九大筑紫地区の埋蔵文化財』九州大学総合研究博物館、2009)のなかで公表されている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

柴田博子、出土文字資料からみた古代の諸県郡、『地方史研究』、査読無、340号、2009、13-16

柴田博子、令制における墓碑と墓標に関する規定について、『宮崎産業経営大学教職課程年報』、査読無、2号、2009、51-64

柴田博子、榜示木簡からみた古代の識字について、『宮崎産業経営大学教職課程年報』、査読無、創刊号、2008、59-73

柴田博子、西海道の古代出土文字資料、『木簡研究』、査読有、29号、2007、199-210

坂上康俊、古代東アジア国際秩序の再編と日韓関係 第2～4章、『第二期日韓歴史共同研究報告書(第一分科会篇)』日韓歴史共同研究委員会、査読無、2010、301-395

坂上康俊、八～十一世紀の日本の南方領域問題、九州史学研究会編『拡大する境界』岩田書院、査読無、2008、31-58

坂上康俊、古代国家をどうとらえるか、『歴史評論』、査読有、693号、2008、2-13

坂上康俊、奈良平安時代人口データの再検討、『日本史研究』、査読有、536号、2007、1-18

〔学会発表〕(計5件)

柴田博子、古代の諸県地域についての予察、宮崎県地域史研究会、2008年4月26日、宮崎公立大学

坂上康俊、九～一〇世紀日本の南方国境問題、第375回隼人文化研究会、2007年5月12日、鹿児島県立歴史資料センター黎明館

永山修一、出土文字資料3題、第401回隼人

文化研究会、2009年11月7日、鹿児島県立  
歴史資料センター黎明館

永山修一、古代の日向・大隅・薩摩三国の位  
相—隼人とその支配をめぐって—、第60回  
地方史研究協議会都城大会、2009年10月18  
日、宮崎県都城市ウェルネス交流プラザ

永山修一、大宰府と南島—近年の奄美大島・  
喜界島の調査をめぐって—、第391回隼人文  
化研究会、2008年12月20日、鹿児島県立歴  
史資料センター黎明館

〔図書〕(計2件)

柴田博子、他、古代南九州の牧と馬牛、高志  
書院、入間田宣夫・谷ロー夫編『牧の考古学』、  
2008、33—58

永山修一、同成社、『隼人と古代日本』、244

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

柴田 博子 (SHIBATA HIROKO)  
宮崎産業経営大学・法学部・教授  
研究者番号：20216013

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

坂上 康俊 (SAKAUE YASUTOSHI)  
九州大学・人文科学研究院・教授  
研究者番号：30162275

永山 修一 (NAGAYAMA SHUICHI)  
ラ・サール学園高校・教諭  
研究者番号：なし